

県道岡田善通寺線道路環境整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

## 生野南口遺跡

平成15年12月

香川県教育委員会

## 例　　言

1. 本書は県道岡田善通寺線道路環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 生野南口遺跡の所在地は、善通寺市生野町である。
3. 調査は、香川県教育委員会が実施し、文化行政課文化財専門員佐藤竜馬が担当した。
4. 本書挿図中の標高は海拔（T.P.）、方位は真北である。
5. 挿図の一部に国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「善通寺」を使用した。
6. 出土遺物・図面は香川県教育委員会が保管し、坂出市府中町字南谷5001-4 香川県埋蔵文化財センターにて収蔵している。

## 本文目次

第1章　調査に至る経緯	1
第2章　遺跡の立地と環境	2
第3章　調査の成果	
第1節　層序	5
第2節　遺構と遺物	7
第4章　まとめ	16

## 挿図目次

第1図　遺跡位置図	3	第8図　SD01断面図	11
第2図　調査区全体図	5	第9図　SD01出土遺物	11
第3図　調査区南壁土層柱状図	5	第10図　SD04断面図	12
第4図　調査区南半部遺構配置図	7	第11図　SD04出土遺物（1）	13
第5図　調査区北半部遺構配置図	8	第12図　SD04出土遺物（2）	14
第6図　SB01平・断面図	9	第13図　II層出土遺物	15
第7図　ピット出土遺物	10	第14図　生野本町遺跡と生野南口遺跡	17

## 表目次

表1　遺構一覧表	19
----------	----

## 写真目次

写真 1 調査風景	1	写真15 ピット出土遺物（1）	11
写真 2 遺跡周辺の空中写真	4	写真16 ピット出土遺物（2）	11
写真 3 調査区南半部全景	6	写真17 ピット出土遺物（3）	11
写真 4 調査区北半部全景	6	写真18 S D01土層	11
写真 5 調査区北半部遺構完掘状況	6	写真19 S D04検出状況	12
写真 6 S B01半裁状況	6	写真20 S D04土層	12
写真 7 S B01完掘状況	6	写真21 S D04完掘状況	12
写真 8 S B01（S P01）半裁状況	6	写真22 S D04上位の包含層（Ⅱ層）	12
写真 9 S B01（S P02）半裁状況	6	写真23 S D04出土遺物（1）	15
写真10 S B01（S P04）検出状況	6	写真24 S D04出土遺物（2）	15
写真11 S B01（S P04）半裁状況	7	写真25 S D04出土遺物（3）	15
写真12 S B01（S P02）完掘状況	7	写真26 S D04出土遺物（4）	15
写真13 S B01（S P03）完掘状況	7	写真27 Ⅱ層出土遺物（1）	15
写真14 S B01（S P04）完掘状況	7	写真28 Ⅱ層出土遺物（2）	15

## 第1章 調査に至る経緯

県道岡田善通寺線は、綾歌町岡田から丸亀市垂水町・満濃町上柳梨を経由して、南側から普通寺市街地にアクセスする路線である。市街地の南限を画す県道觀音寺善通寺線との接続の利便性を増すため、接続部分の拡幅・整備が計画され、平成14年5月に埋蔵文化財の有無ならびに取り扱いについて、香川県教育委員会事務局文化行政課が普通寺土木事務所と協議を行った。その結果、工事予定範囲には周知の埋蔵文化財包蔵地は所在しないが、北側50mに古代前期の生野本町遺跡があることから、工事の際に埋蔵文化財の有無を確認し、それに基づき対応を協議することで合意した。

平成14年末には協議範囲の工事が開始され、掘削部分を文化行政課職員が立会したところ、中世後半の遺物を多量に含む溝の存在を確認した。このため、文化財保護法第57条の6に基づき、普通寺土木事務所長から県教育長宛に遺跡の発見通知が提出された。これを受けて文化行政課では、当該地点を「生野南口遺跡」と命名し、発掘調査を実施した。

調査は70m<sup>2</sup>を対象として、平成15年1月16日と平成15年2月7日に実働2日間で行われた。短期間の調査であったが、第3・4章のように多大な成果を挙げることができた。なお香川県土木部普通寺土木事務所や施工業者をはじめとして、下記の方々の御教示・御協力をいただいた。記して感謝申し上げる（順不同・敬称略）。

普通寺市教育委員会・海邊博史・渡邊淳子・渡部明夫・信里芳紀・松本和彦・乗松真也・加納裕之・田村隆明・佐藤ルミ・山元素子・猪木原美恵子・青谷真理・松崎千春・松本恭子・森川理恵・地崎裕子・木鳴直子・西岡達哉・東條俊子・長谷川郁子・久保真由美・松下美抄恵・岡野雅子



写真1 調査風景（西から）

## 第2章 遺跡の立地と環境

生野南口遺跡は、普通寺市街地の南端部に位置する。普通寺市街地は、元々は古利普通寺を中心に形成された散在的な村落を出发点にしていることは、14世紀初頭の『一円保差図』から窺えるが、本格的な門前町としての体裁を整えるのは近世に入ってからである。その後、明治29年に陸軍第11師団が置かれたのを契機に、「軍都」としての町の再編・拡充が進み今日の景観に至っている。現在でも旧司令部や旧倉庫など、旧軍関係の建物群が豊富にみられる。また吉原射撃場跡のような、土木構築物も遺存している。

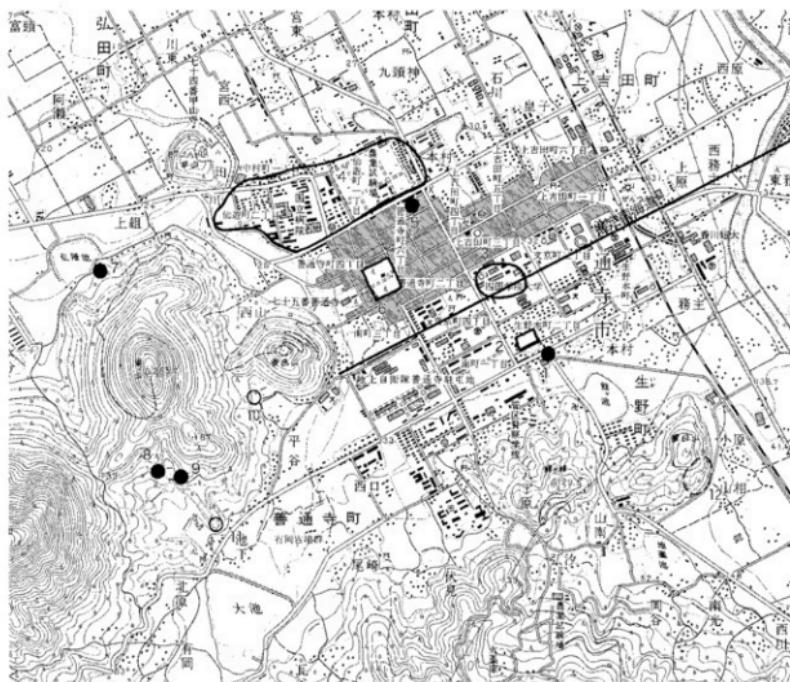
現在の市街地は、大麻山や五岳山など標高300m以上の急峻な山塊の麓に形成されており、一見したところでは条里型地割が広がる平野部であるが、意外に勾配が急で扇状地的な地形とも見なし得る。このような地形面の西側は弘田川に、中央部は弘田川支流の中谷川に、東側は金倉川に開析されており、大局的にはこれら河川により両された東西2つの微高地が存在する。生野南口遺跡は、丘陵端部から平野部へ移行する地点で、西側微高地の頂部付近に位置することになる。

周辺の遺跡をみると、弥生時代中期～終末期にかけては西側微高地北半部の広大な範囲に旧練兵場遺跡群が展開する。より細かな地形（微高地）でまとまる単位が、複数集合して大集落を形成しており、その内部には大型掘立柱建物や鍛冶工房などを含んでいる（森下2003）。このような遺跡群は、遅くとも古墳時代前期のうちに解体するとみられ、古墳時代中期の動向は不明である。古墳時代後期後半（7世紀初頭）以降には、旧練兵場遺跡の一部や周辺で竈付きの堅穴住居を主体とする集落が出現する（笠川1989）。集合規模に若干の偏差が認められるが、大型の掘立柱建物で構成されるような「居館」の存在は明確でない。

7世紀末葉～8世紀初頭の新たな動向としては、生野本町遺跡の出現が注目される。雨落ち溝を伴う欄列（築地状の区画）や溝により、1町前後の範囲が区画され、その内部の半町四方が大型掘立柱建物の存在する中心域と想定される。須恵器主体ながら暗文を施す土師器が一定量存在する土器組成も、特徴的である（國木1993）。継続期間が8世紀前葉を下限とする短期間ではあるが、上記特徴から官衙（多度郡衙など）の可能性をもつ遺跡である。

この他、筆ノ山南麓と磨臼山南麓では、8世紀～9世紀の火葬墓群の存在が知られる。中でも葉壺形の銅製骨蔵器を伴うカンチンバエ古墓は、火葬墓の造営階層においても傑出した階層の存在を窺わせる（佐藤1995）。

ところで市街地周辺に広がる条里型地割は、丸龜平野各地の発掘成果から、7世紀末葉～8世紀初頭に起源が求められる（森下1997）。弘田川は条里型地割に規制された流路をもつが、同様な状況は『一円保差図』にもみえ、少なくとも中世前期まで遡ることが確定である。現在の弘田川河道は浸食による河床の低下が著しく、周辺耕地への配水が容易ではない。このような土地条件は古代末～中世初頭に形成された可能性が高く、弘田川上流の大池は新たな土地条件に対応した灌漑用水源として構築されたものであろう。



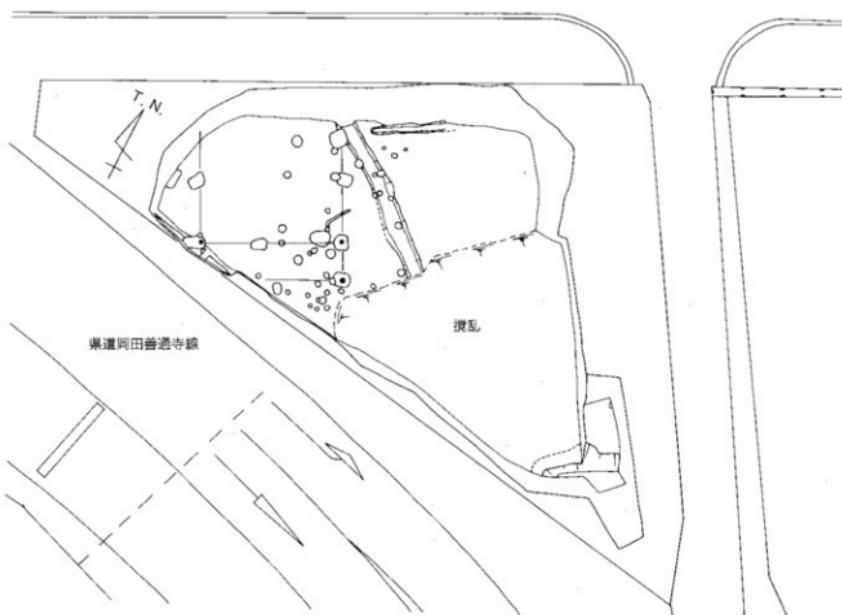
- |             |             |
|-------------|-------------|
| 1. 生野南口遺跡   | 7. 墓山古墓     |
| 2. 生野木斯遺跡   | 8. 兼谷古墓     |
| 3. 四國学院大學遺跡 | 9. カンチンバエ古墓 |
| 4. 旧練兵場遺跡   | 10. 平谷古墓    |
| 5. 仲村虎寺     | 11. 鴨坂古墓    |
| 6. 鮎酒寺      | 12. 磨白山古墓   |

第1図 遺跡位置図 ( $S = 1/25,000$ )



写真2 遺跡周辺の空中写真（国土地理院S 1-62-4 C13-18）

### 第3章 調査の成果



第2図 調査区全体図 ( $S = 1/200$ )

#### 第1節 層序

基本層序は、表土層（旧耕土層：I層）・遺物包含層（II層）・基盤層（III層）に分けられる。

III層は淡黄褐色シルトであり、その下位には径10cm前後の砂岩亜円礫が東方向に傾斜していた。火山灰層などは確認していないが、丸亀平野通有の起伏の顯著な基盤礫層を埋め、平準化するようにシルト層が堆積したものと思われる。この淡黄褐色シルト上面で、古墳時代・古代・中世の遺構が検出された。

III層の上位には、層厚10~20cm程度の淡茶褐色シルト（II層）が堆積していた。マンガン粒を多量に含み、やや締まりの悪い土質であることから、旧耕土の可能性もある。中世土器とともに近世初頭の肥前系陶器が出土していることから、この層の形成時期に近世初頭



第3図 調査区南壁土層柱状図 ( $S = 1/20$ )



写真3 調査区南半部全景（北から）



写真4 調査区北半部全景（東から）



写真5 調査区北半部遺構完掘状況（東から）



写真6 SB01半裁状況（東から）



写真7 SB01完掘状況（東から）

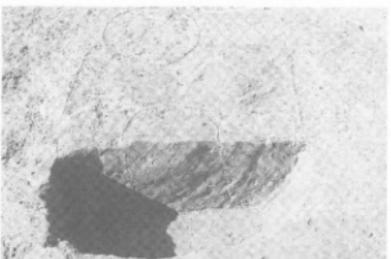


写真8 SB01 (SP01) 半裁状況（東から）

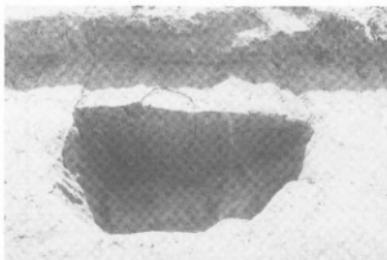


写真9 SB01 (SP02) 半裁状況（北から）



写真10 SB01 (SP04) 検出状況（東から）

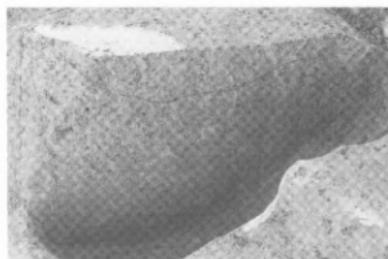


写真11 SB01 (SP04) 半掘状況 (北から)



写真12 SB01 (SP02) 完掘状況 (東から)

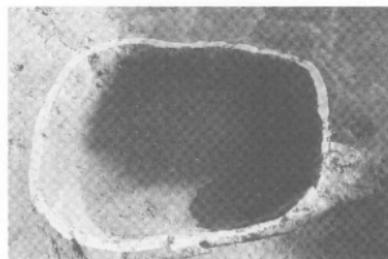


写真13 SB01 (SP03) 完掘状況 (北から)

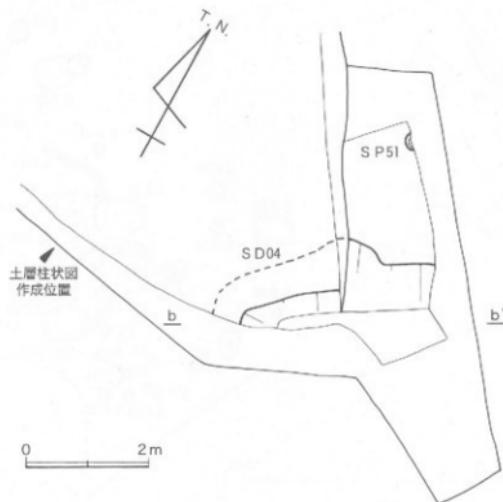


写真14 SB01 (SP04) 完掘状況 (東から)

を含むことは確実である。近世中葉以降の遺物は出土していない。この層の堆積後に面的な削平が行われ、旧耕土（I層）が堆積している。以上から、近世中葉から近代のいずれかの時点で、付近一帯の面的な削平と耕地化が進行したと推測される。

## 第2節 遺構と遺物

今回の調査で検出できた遺構は、掘立柱建物1棟・ピット41基・溝4条である。工事中の搅乱で遺構の有無を確認できなかった調査区中央部を除くと、遺構は比較的濃密に分布しているといえる。時期別の遺構数は、古墳時代が溝



第4図 調査区南半部遺構配置図 ( $S = 1/80$ )

2条（S D01・02）、古代前期が掘立柱建物1棟（S B01：S P01～06・08・09）・ピット1基（S P07）、中世がピット41基（S P10～50）・土坑1基（S K01）・溝2条（S D03・04）である。古代前期と中世では掘り方理土が明確に異なっているため、両者の識別は容易である。

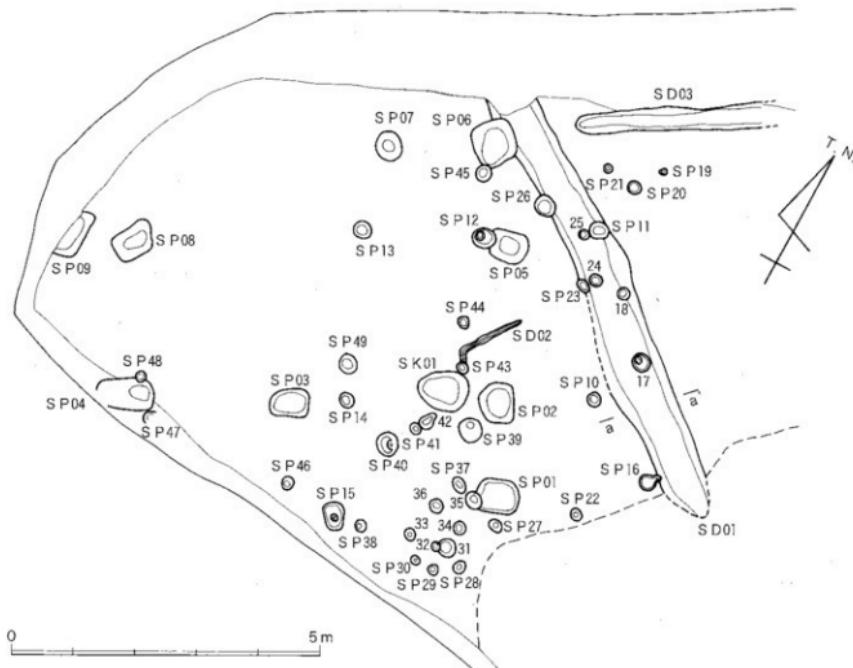
また遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・瓦器・瓦質土器・備前産陶器・亀山産陶器・肥前系陶器、サヌカイト製石器がある。出土量は28%・コンテナ1箱である。

以下では主要遺構・遺物について記述する。なお、各遺構の概要は第1表を参照されたい。

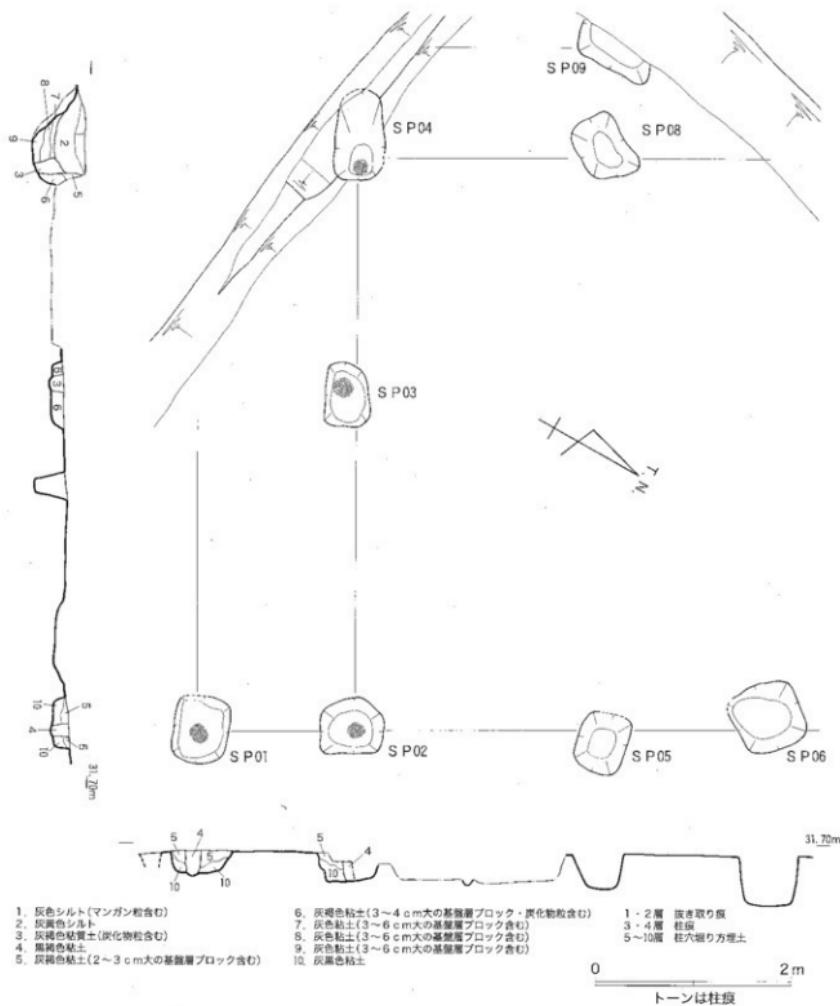
#### S B01（第6・7図、写真6～14）

調査区西端部で灰褐色系粘土を埋土とするピットが10基検出され、その中で規則的な配置を構成するS P01～06・08・09の8基を1棟の掘立柱建物として復元した。南辺と西辺に庇を伴う、梁間2間（5.9m）・桁行3間以上（4.3m以上）のプランで、身舎の床面積は40m<sup>2</sup>以上に達すると推測される。主軸方位はN-29°-Wで、周辺の条里型地割にはほぼ合致する。

柱穴掘り方は、平面形態が隅丸長方形（隅丸方形）を呈しており、断面形態は底面が平坦で壁面が急に立ち上がる逆台形を呈する。S P01～04には、直径15cm前後の円形プランの柱痕が認められた。柱痕下端には、掘り方底面に食い込むように沈下した形跡が観察できる。柱痕を取り巻く掘り方理土は灰褐



第5図 調査区北半部遺構配置図 (S = 1/80)



第6図 SB01平・断面図 ( $S = 1/50$ )

色粘土が主体で、基盤層ブロックや炭化物粒を含む。S P04では、掘り方埋土・柱痕の上位に、掘り方西半を切り込む灰色系シルトが堆積しており、抜き取り痕と考えられる。

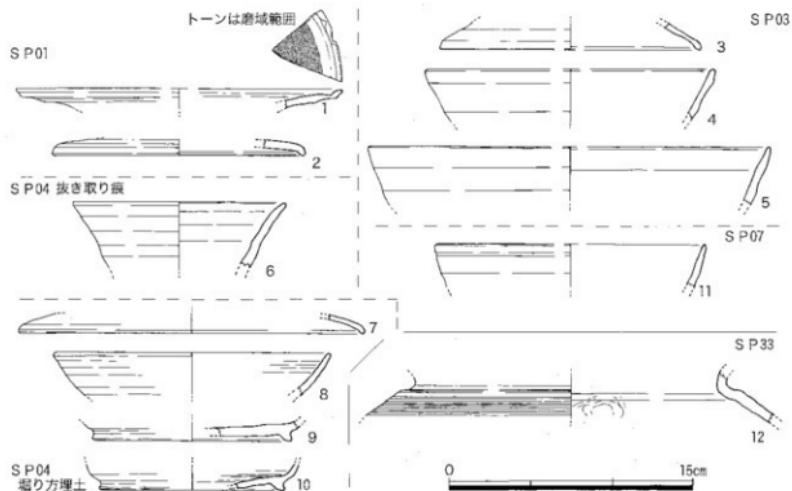
遺物は、柱穴掘り方埋土と抜き取り痕から土師器と須恵器が若干量出土した。1・2はS P01掘り方埋土出土の須恵器杯蓋である。1は口縁端部が外開き気味であり、若干焼け歪んでいる。天井部内面が著しく摩滅していることから、墨痕は認められないものの転用硯と考えられる。2は扁平な器体と、丸く太い口縁端部をもつ。

3～5はS P03掘り方埋土出土の須恵器杯である。3は笠形の高い器体をもつ杯蓋で、口縁端部は丸く収められる。4・5は須恵器杯で、細片のため口径復元が困難だがかなり大法量の製品とみられる。いずれも口縁端部が丸く太く収められ、口縁部直下に回転ナデによる窪みが認められる。

6～10はS P04出土の須恵器で、6は抜き取り痕、7～10は掘り方埋土出土である。6は長頸瓶の口縁で、分厚い器壁と丸い端部をもつ。7は杯蓋で、丸く収めて明瞭な縫面をなさない口縁部をもつ。8～10は杯で、8・9は同一個体の可能性がある。砂粒が多く、ロクロ目を演すようなざらついた質感の器面が特徴的である。外傾気味の浅い器体をもち、外端部で接地するやや低い高台をもつ。10は、9よりも薄い器壁で丸味のある腰部をもつ。高台内側には、爪形压痕が認められる。また、見込みには不定方向のナデ調整が施される。

11はS P07出土の須恵器杯である。直立気味の箱形の器体をもち、口縁部外面直下に弱い凹面が認められる。

以上の須恵器は、定型化した低い高台とカエリを伴わない蓋をもつ、奈良時代的な杯B（奈文研分類）であり、概ね8世紀前葉～中葉に位置付けられる。異器種での比較だが、抜き取り跡出土須恵器と掘り方埋土出土遺物には時期差を積極的に見出すことは難しい。



第7図 ピット出土遺物 (S = 1 / 3)

中世ピット群（第5図、写真4・5）

直径0.1～0.3m前後の平面円形のピットが、擾乱以外の調査区全面に分布する。掘り方埋土は、縮まりの悪い灰白色砂質土であり、明瞭な柱痕はない。掘立柱建物を構成する可能性を考えたが、S P 11・12・13が東西方向に並ぶ以外は企画的な配置を認めることはできなかった。遺物は瓦器碗などの中世前期遺物と、備前産陶器壺などの中世後期遺物が少量出土した。

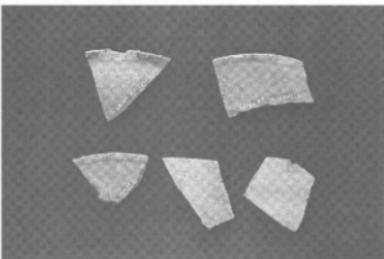


写真15 ピット出土遺物（1）

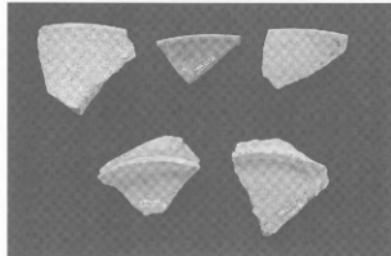


写真16 ピット出土遺物（2）

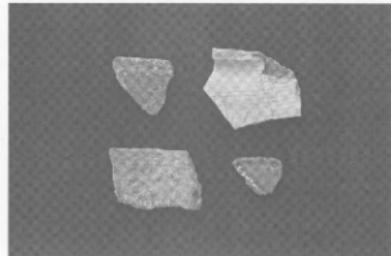


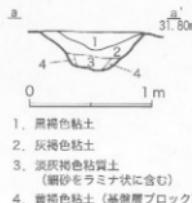
写真17 ピット出土遺物（3）

S D01（第8・9図、写真15）

N-52°-Wの方向にほぼ直線的に延びる溝である。地形との関係をみると、概ね微高地縁辺を等高線に沿うように開削されているようである。断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色粘土の上層と灰褐色系粘土の下層に大別でき、下層下半はラミナを含み両側に基盤層ブロックの崩落土がみられることから、埋没初期には流水状態であったことが想定される。出土遺物には細片が多く、また層位的な偏在傾向もみられない。

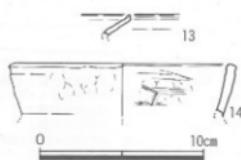


写真18 SD01土層（南から）



第8図 SD01断面図

(S = 1/20)



第9図 SD01出土遺物 (S = 1/3)

かろうじて形態がわかる細片2点を図示した。13は弥生土器の口縁部で、強い横ナデ調整により端部を摘み上げることから、在地産の庄内系壺とみられる。14は直立気味で開かない口縁部をもち、全体に器壁が分厚い粗雑な作りであることから、古墳時代中期壙の布留系壺と考えられる。他にも体部片や底部片が若干出土しているが、概ね弥生時代後期終末～古墳時代中期の幅で捉え得るものである。

S D04 (第10~12図、写真16~18)

調査区南端で検出した、W-29° - Nの主軸方位をもつ溝である。溝は東西方向に延びるが、西端部で肩部が立ち上がるため、逆L字形に南側へ屈曲するか、土橋状に完結するものと推測される。溝は断面U字形を呈しており、検出面からの深さは0.65m、幅は3m程度に復元できる。埋土は、淡茶褐色粘



写真19 S D04検出状況（北から）



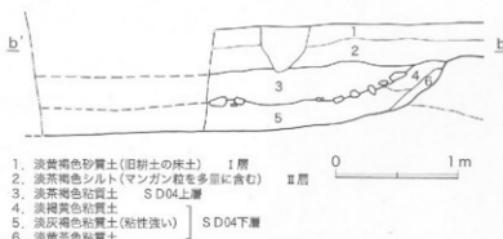
写真20 S D04土層（北西から）



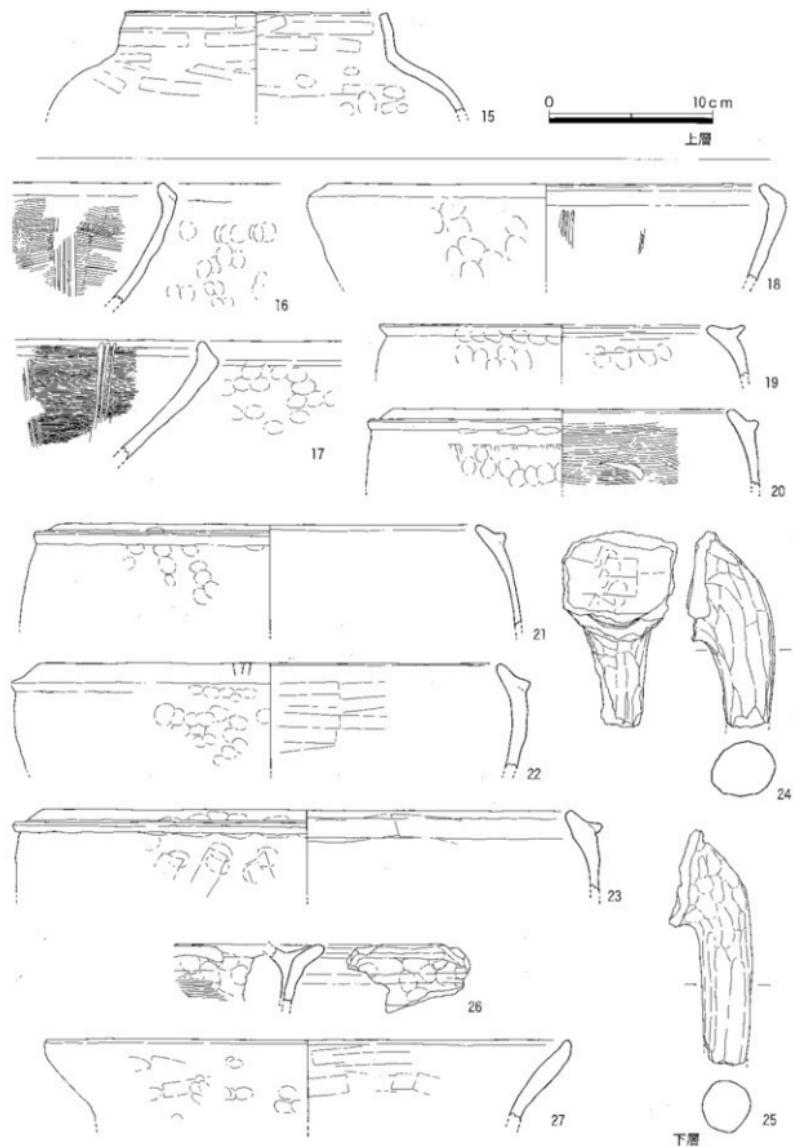
写真21 S D04完掘状況（北から）



写真22 S D04上位の包含層（Ⅱ層）（北から）



第10図 S D04断面図 (S=1/3)

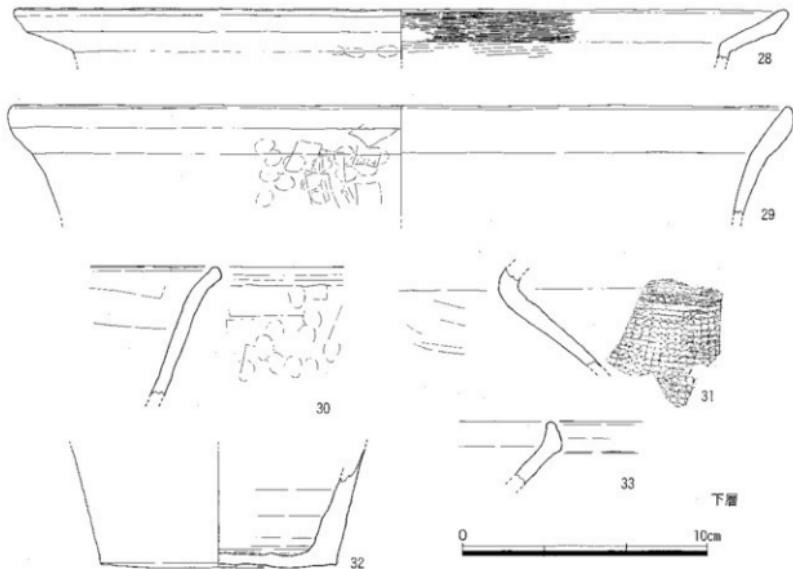


第11図 SD04出土遺物(1) (S=1/3)

質土（上層）と淡灰褐色粘質土（下層）に分けられ、上下層の境（中位）には多量の砂岩円礫とともに多量の中世土器が遺存していた。一定の滞水状態で下層が堆積した後、碟や土器を人為的に投棄したものと思われる。

第11・12図に出土土器を図示した。15は上層出土の土師質土器茶釜形（鍋）である。内傾気味に立ち上がる口縁部と、よく膨らんだ体部上半からなる。口縁端部には、内傾する明瞭な平坦面が認められる。

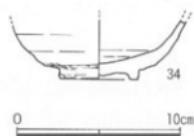
16～33は中位の罐群を中心とした下層出土遺物である。16～18は土師質土器擂鉢で、外開きの体部から屈曲して内湾する口縁部をもつ。16の体部外面には煤が付着し、口縁部も被熱・変色することから、加熱調理具としても使用されたとみられる。19～25は土師質土器足釜である。内湾する口縁部と短い突帯状の鋸部をもち、外面では口鋸部以外は無調整を基本とする。脚部は基部（体部との接合部）が太いもの（24）と、細身のもの（25）の2者がある。前者では、接合部に多量の補強粘土を塗り込むために、基部が太くなっている状況が観察できる（写真25）。このような太い基部をもつ足釜脚部は、丸亀平野に類例が散見され、高松平野ではほとんど確認できない。26は土師質土器把手付鍋である。縁帯状の鋸部をもつ器体に1対の台形状把手を貼付し、把手外方から穿孔する。把手周縁はナデ調整であり、中世後期でもやや新しい時期の所産と考えられる。27～30は土師質土器鍋である。いずれも口縁端部を丸く收める、丸亀平野に通有の形態である。28は頸部の屈曲が明瞭であり、内面にハケ目調整が施される。27・29・30は頸部の屈曲が弱く、ハケ目調整されないもので、28よりも明らかに後出的な特徴をもつ。31は中世前期の亀山焼壺、32は中世後期の備前產陶器壺、33は中世後期の東播系須恵器系捏鉢である。



第12図 SD04出土遺物（2）（S=1/3）

以上、S D04出土遺物は土師質土器各器種からみて、15世紀中葉～16世紀代を中心とした年代が想定可能である。搬入品には若干過るものが散見される。

なお、S D04廃絶後に直上に堆積する包含層（II層）から、17世紀初頭～前葉の肥前系陶器碗（第13図34）が出土した。



第13図 II層出土遺物 (S = 1 / 3)

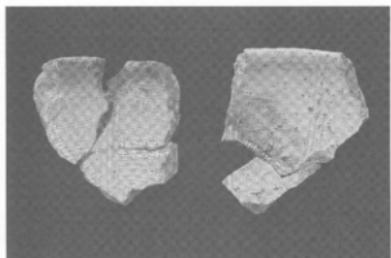


写真23 S D04出土遺物 (1)

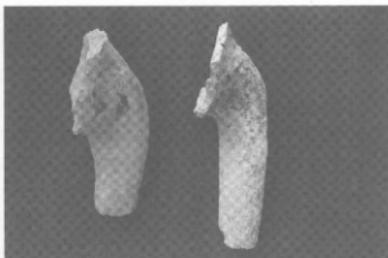


写真24 S D04出土遺物 (2)

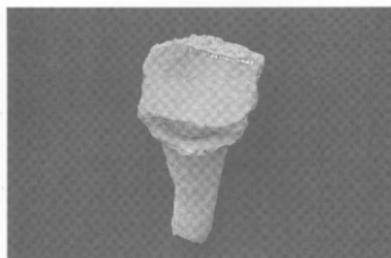


写真25 S D04出土遺物 (3)

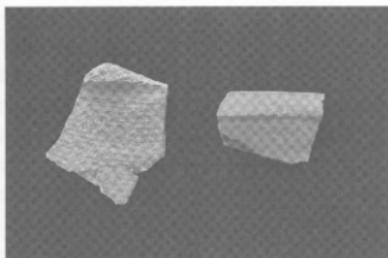


写真26 S D04出土遺物 (4)

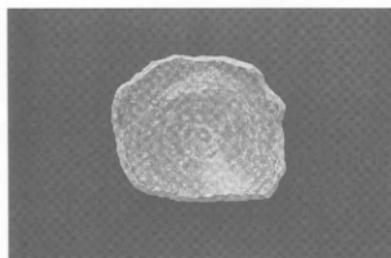


写真27 II層出土遺物 (1)

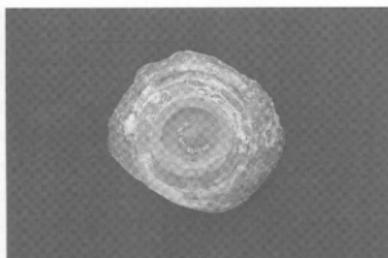


写真28 II層出土遺物 (2)

## 第4章　まとめ

### 第1節　古代の遺構配置について－生野本町遺跡との関係－

今回の発掘は小面積の調査であったが、8世紀前葉～中葉の掘立柱建物1棟が検出され、それが40m<sup>2</sup>を超える庇付建物に復元できた点が重要である。讃岐地方における7～10世紀の掘立柱建物では、40m<sup>2</sup>以上は各地域・各遺跡でも少數の建物に限られ、「大型」に分類される。また須恵器杯蓋の転用器なども出土していることから、一般集落（20m<sup>2</sup>前後ないし以下の建物で単位が構成される散在的な集落。丸亀市郡家原遺跡 8世紀代集落が典型）とは異なる性格をもつことが想定される。ところで普通寺市街地付近は、普通寺（8世紀中葉）や仲村庵寺（7世紀末葉）の存在からも窺えるように、古代前期においては地域（多度郡）の中核的な役割を果たしていたといえるが、現在までのところ8世紀前後の大型建物を伴う遺跡は比較的限られており、当遺跡の他には隣接する生野本町遺跡を挙げ得るに過ぎない。当遺跡と生野本町遺跡とは、①距離的な近さ（50mしか離れていない）、②遺跡の盛行年代の重複、③条里型地割と一致する主軸方位、などの諸点から、本来は同一遺跡である蓋然性が高い。したがって、古代の本遺跡を評価するためには、生野本町遺跡の調査成果との関連付けが必要な検討項目となろう。

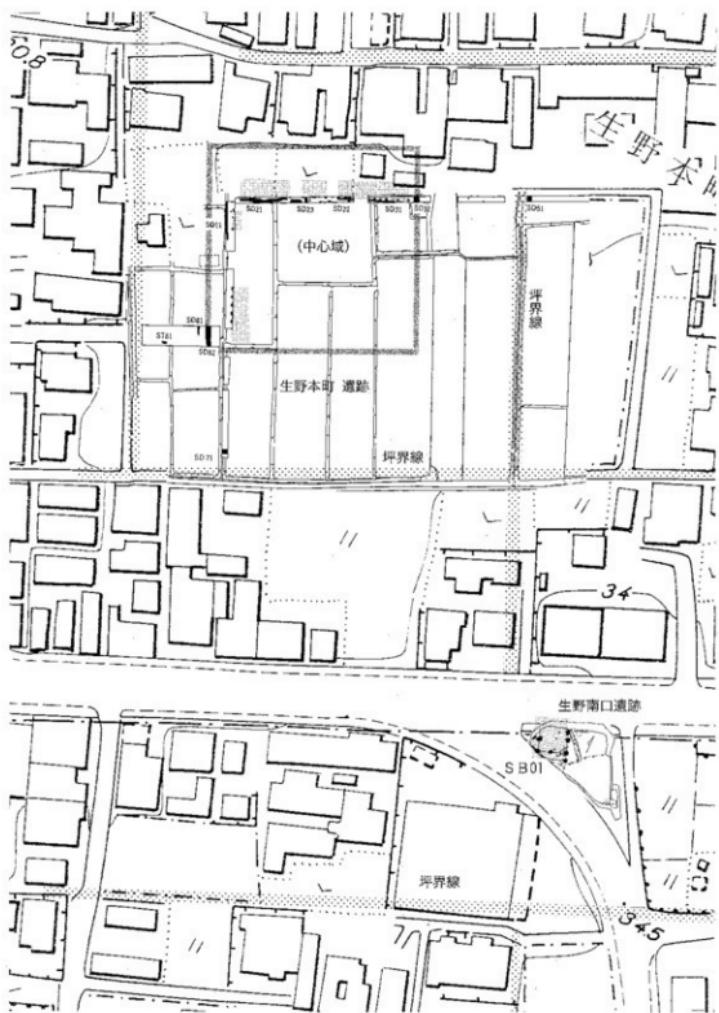
生野本町遺跡では、方形掘り方をもつ柱穴列が2箇所と区画溝が検出された。報告書では、区画溝と柱穴群の分布状況から、東西については1／2町の範囲が中心域とされているが、これは条里型地割1坪のほぼ中央に位置することになる。この範囲の地割は、周囲よりもやや高いことが都市計画図の等高線から確認でき、中心域が微高地の頂部を地業として造成された可能性も指摘できる。

この中心域の西辺に南北棟が1ないし2棟（南側の建物は50m<sup>2</sup>以上）、北辺に東西棟が3棟ないしこちらが繁がった1棟が存在する。北辺建物は報告書では棚列とするが、雨落ち溝（SD21・22・31）は柱穴列の南側のみで北側には存在しないため、北側調査区外に2・3区柱穴列に対応する柱穴列が存在する可能性があり、50m<sup>2</sup>前後の建物2棟と小規模建物1棟か、最長で桁行長42mを測る東西方向の「長屋」と考えることもできる（第14図）。なお、これらの建物は、7世紀末葉～8世紀初頭を中心とするが、雨落ち溝（SD21）や区画溝（SD81・32・51）では8世紀前葉の遺物が出土する。また建物自体にも建て替えなどの変更の痕跡がみられないことから、全体としては8世紀前葉を継続期間の下限として捉えるのが妥当であろう。

まとめるに生野本町遺跡では、発掘対象となった中心域の西辺と北辺に「長屋」を伴う可能性がある。区画性と配置の企画性が明瞭な点が、下川津遺跡や前田東・中村遺跡など「官衙関連遺跡」とは明確に異なり、官衙的要素をより強く示すものである。中心域の範囲が1／2町であることも併せて、郡衙政府（郡庁・郡院）としての要件を備えていると評価できる。

生野南口遺跡は、生野本町遺跡の所在する坪の南東側に位置している。生野本町遺跡とは坪界溝SD71・51によって区画されており、検出されたSB01が2面庇付建物であることは、政府を構成する建物とは異質な要素である。中心域の政府機能とは異なる役割を考える必要があろう。各地の郡（評）街道跡では、政府の周辺に正倉・館などが「官衙ブロック」を形成しており、それらを含めた郡衙の範囲は4万m<sup>2</sup>以上であることが多い（山中1994）。このような郡衙の構成・範囲を前提にすると、生野南口遺跡が政府周辺の官衙ブロックである可能性も考えられる。なお、生野本町遺跡の北側2町には余利帯が東西方向に延びており、南海道の存在が想定されている（金田1989）。

以上は現段階では可能性の提示に留まるため、今後、周辺の開発行為に際して適宜確認調査を積み重ねつつ、遺跡の内容・構成を明確にしていくことが必要である。



第14図 生野本町遺跡と生野南口遺跡 ( $S = 1/2,500$ )

## 第2節 須恵器の胎土と生産地について

出土した8世紀の須恵器は、肉眼観察による胎土中の砂粒の混入状況と素地の粗密から、いくつかのバリエーションが認められる。丸亀・高松平野での状況も踏まえると、以下の4群に区分可能である。

1群：均質な素地をもつ。粘性に優れた粘土とみられる。若干の空隙や砂粒を少量含むものもあるが、これらの素地も均質であり、焼成良好品の破断面には皺が目立たない。堅密な焼成で、断面セピア色、表面黒灰色を呈するものが多い。

2群：微細な砂粒を多く含む、やや粗質な胎土をもつ。「ざっくりした」印象を受け、破断面が皺状になるものが多い。焼成・色調は1群に近い。

3群：大粒の砂粒を多く含む、粗質な胎土をもつ。破断面は凹凸の顕著な粗面になる。良好な焼成品では、破断面が暗灰色・表面が灰色を呈する。

4群：砂粒を多く含まないが、やや粗質な胎土をもつ。

報告した資料でみると、胎土1群は1・2・10、胎土2群は4・5・7、胎土3群は3・8・9・11、胎土4群は6が該当する。

生産地（窯跡）資料との対応関係をみると、胎土1群は綾南町十瓶山窯跡群でよくみられ、胎土2群も同窯で一定量認められる。胎土3群は十瓶山窯では皆無といってよく、三野町・高瀬町の三野窯跡群では普遍的な存在である。三野窯では胎土2群も少量みられる。

本遺跡の周辺事例をみると、生野本町遺跡では胎土3群が目立ち、胎土1群は少ない。同様な傾向は金蔵寺下所遺跡・稻木遺跡でも指摘でき、7世紀末葉～8世紀初頭では三野窯製品が卓越するようである。これに対し、位置がやや離れるが8世紀中葉～後葉の郡家原遺跡では、胎土1群が圧倒的に多く、十瓶山窯製品ではほぼ占められるようになる。丸亀平野では、8世紀前葉頃に三野窯製品主体から十瓶山窯製品主体に転換する状況が想定できる。

生野南口遺跡では須恵器の出土量が僅かなため、量的な傾向を読み取ることは難しいものの、十瓶山窯・三野窯のいずれの製品も認められる。これは、本遺跡の時期が生野本町遺跡の継続期間の後半段階を主体とするためあり、過渡的な状況を示すといえよう。

## 第3節 その他の時期の遺構

### 弥生時代後期末～古墳時代中期

S D01は微高地頂部を北西方向に延びるが、これは周辺の地形傾斜方向と同じである。少量の遺物は認められるが細片が多く、また直近に集落関連遺構がみられないことから、集落に伴うものではなく、灌漑用水路の可能性がある。近い時期の集落遺構としては、生野本町遺跡7区S H71（古墳時代前期）がある。

### 中世

中世のビット群と大溝（S D04）を検出した。生野本町遺跡では中世遺構は確認されていないため、本遺跡を中心とした範囲に中世集落が広がると推測される。集落は中世前期に遡る可能性もあるが、主体は中世後期の15～16世紀であろう。遅くとも16世紀のうちに廃絶し、17世紀初頭には上位に包含層ないし耕土（II層）が形成される。香川県内の中世後期集落は近世へと継続しない事例が多く、本遺跡についてもこれと軌を一にすると評価できる。

遺構名	長径	短径	深さ	埋土	時期	出土物
S P01	0.7	0.6	0.25	灰褐色粘土ほか	古代	土師器器種不明2・須恵器杯1・杯蓋1・盆転用隠1(胎土1群)
S P02	0.65	0.6	0.3	灰褐色粘土ほか	古代	土師器蓋3・器種不明4・須恵器甕1(胎土4群)
S P03	0.7	0.45	0.15	灰褐色粘土ほか	古代	須恵器杯2(胎土2群)・杯蓋2(胎土3群)
S P04	0.94	0.52	0.55	灰黄色シルトほか (抜き取れ方)	古代	土師器杯1・器種不明2・須恵器杯1・壺2(胎土3群)・長頸瓶2(胎土4群)
S P05	0.65	0.5	0.37	灰褐色粘土	古代	土師器蓋2・須恵器杯3(胎土1群1・3群2)・杯蓋1(胎土2群)・甕2(胎土1群)
S P06	0.7		0.59	灰褐色粘土	古代	土師器杯4・器種不明4・須恵器壺3(胎土4群)
S P07	0.45	0.4		灰褐色粘土	古代	須恵器甕1(胎土3群)
S P08	0.74	0.5	0.12	灰褐色粘土	古代	
S P09	0.85	0.3~	0.08	灰褐色粘土	古代	
S P10	0.25		0.15	淡灰白色砂質土	中世	
S P11	0.33	0.25	0.39	淡灰白色砂質土	中世	
S P12	0.4	0.3	0.41	淡灰白色砂質土	中世	土師質土器器種不明2
S P13	0.3		0.22	淡灰白色砂質土	中世	
S P14	0.25		0.38	淡灰白色砂質土	中世	土師質土器鍋1・瓦質土器器種不明1
S P15	0.45	0.35	0.2	淡灰白色砂質土	中世	須恵器杯1(胎土1群)
S P16	0.4	0.28	0.22	淡灰白色砂質土	中世	
S P17	0.3		0.28	淡灰白色砂質土	中世	
S P18	0.2		0.1	淡灰白色砂質土	中世	
S P19	0.14		0.09	淡灰白色砂質土	中世	
S P20	0.22		0.03	淡灰白色砂質土	中世	
S P21	0.15		0.02	淡灰白色砂質土	中世	
S P22	0.2		0.12	淡灰白色砂質土	中世	
S P23	0.25	0.15	0.09	淡灰白色砂質土	中世	
S P24	0.25		0.17	淡灰白色砂質土	中世	
S P25	0.2		0.28	淡灰白色砂質土	中世	
S P26	0.35		0.09	淡灰白色砂質土	中世	
S P27	0.2		—	淡灰白色砂質土	中世	
S P28	0.2		0.37	淡灰白色砂質土	中世	土師質土器杯2・瓦器焼1
S P29	0.15		0.23	淡灰白色砂質土	中世	備前陶器壺1
S P30	0.15		0.14	淡灰白色砂質土	中世	土師質土器器種不明1
S P31	0.3		0.09	淡灰白色砂質土	中世	
S P32	0.15		0.15	淡灰白色砂質土	中世	
S P33	0.2		0.11	淡灰白色砂質土	中世	須恵器壺1(胎土4群)
S P34	0.2		0.13	淡灰白色砂質土	中世	
S P35	0.3		0.24	淡灰白色砂質土	中世	サヌカイト製火打ち石1
S P36	0.2		0.05	淡灰白色砂質土	中世	
S P37	0.3	0.2	0.04	淡灰白色砂質土	中世	
S P38	0.2		0.15	淡灰白色砂質土	中世	
S P39	0.35		0.44	淡灰白色砂質土	中世	
S P40	0.4	0.35	0.31	淡灰白色砂質土	中世	
S P41	0.15		0.1	淡灰白色砂質土	中世	
S P42	0.35	0.2	0.1	淡灰白色砂質土	中世	
S P43	0.2		0.21	淡灰白色砂質土	中世	
S P44	0.2		0.11	淡灰白色砂質土	中世	土師質土器鍋1
S P45	0.25		0.08	淡灰白色砂質土	中世	
S P46	0.2		0.15	淡灰白色砂質土	中世	
S P47	0.25		—	淡灰白色砂質土	中世	
S P48	0.2		—	淡灰白色砂質土	中世	
S P49	0.3		0.06	淡灰白色砂質土	中世	
S P50	0.2		—	淡灰白色砂質土	中世	
S K01	0.85	0.6	0.13	淡灰白色砂質土	中世	
S D01	7.56	0.45	0.31	黒褐色粘土ほか	古墳	弥生土器か土師器蓋31・サヌカイト碎片1・土師質土器鍋1(混入)
S D02	1.25	0.1	0.01	淡茶褐色粘土質土	古墳?	
S D03	3.05	0.35	0.06	淡灰白色砂質土	中世	
S D04	3.8	2.1~	0.6	淡茶褐色粘土質土 (上層)	中世	土師質土器壺2・足釜3・錐鉢3・茅蓋形1・瓦質土器壺(?)1・鳥山系土器 蓋1・備前系陶器壺1・平瓦2・須恵器杯(胎土2群)・長頸瓶1(胎土1群)
				淡灰褐色粘土質土 (下層)		土師質土器皿1・錐1・錐鉢3・足釜19・鍋22・備前陶器壺1・壺1・鳥山系須 恵器蓋1・東播系須恵器探鉢1

表1 遺構一覧表

参考文献（発行年順）

- 筒川龍一 1989 『仲村庵寺』普通寺市教育委員会
- 國木健司 1993 『生野本町遺跡』香川県教育委員会
- 佐藤竜馬 1993 「讃岐における古代の火葬墓」『(財)香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅰ』
- 山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』
- 森下英治 1997 『丸亀平野条里型地割の考古学的検討』『(財)香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要V』
- 森下英治 2003 「国立普通寺病院改修事業に伴う旧練兵場遺跡発掘調査概報1」「埋蔵文化財発掘調査概報』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

## 報告書抄録

ふりがな	けんどうおかだせんつうじせんどうろかんきょううせいかいじぎょうにともなうまいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこく							
書名	県道岡田善通寺線道路環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
副書名	生野南口遺跡							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	佐藤竜馬							
編集機関	香川県教育委員会							
所在地	〒760-8582 香川県高松市大神前6番1号天神前分庁舎 電話087-832-3784~3787							
発行機関名	香川県教育委員会							
発行年月日	西暦2003年12月31日							
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数	
23頁	3頁	20頁	0頁	0頁	28枚	14枚	0枚	
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町	遺跡	○××	○××		m <sup>2</sup>	
生野南口遺跡	香川県普通寺市生野町 1870-2, 1870-5			34° 13' 21"	133° 47' 08"	2003.1.16 2003.2.7	70m <sup>2</sup>	県道岡田善通寺線道路環境整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
生野南口遺跡	集落跡	弥生・古墳・古代・中世	堀立柱建物・柱穴・溝状遺構	古式土師器・須恵器・中世土器・近世陶器	古代の堀立柱建物			

県道岡田善通寺線道路環境整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

生野南口遺跡

平成15年12月31日

発 行 香川県教育委員会  
香川県高松市天神前6番1号天神前分庁舎

印 刷 (株)美巧社